

三一新書 318

浮浪児の栄光

佐野美津男 著

三一書房

浮浪児の栄光

定価 180 円

1961 年 10 月 16 日 第 1 版発行

著 者 © 佐 野 美 津 男
1961 年

発 行 者 田 畑 弘

印 刷 所 同興印刷株式会社

製 本 所 本間製本株式会社

発行所 株式会社 三 一 書 房

東京都千代田区神田駿河台 2 の 9

電 話 東 京 (201) 9581~5 番

振 替 東 京 8 4 1 6 0 番

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

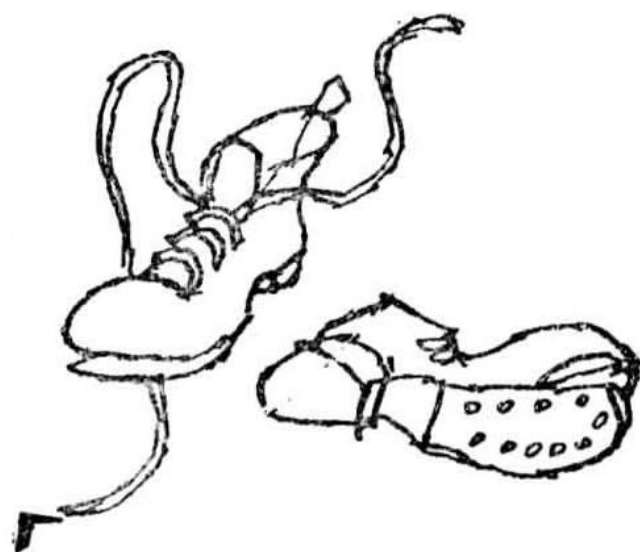
三一新書 318

浮浪児の栄光

佐野美津男著

三一書房

浮浪児の栄光／目次



練鑑ブルース

人里離れた塀のなか

この世の地獄があらうとは

夢にも知らないひとかある

知らなきやおいらが教えましょ

身から出ました錆ゆえに

いやなザリ公にパクられて

手錠かけられ見され

送り込まれた裁判所

検事や判事のお調べに

情状酌量余地もなく

ついた罪名強姦罪

あわれこの身は少年院

青いバスに乗せられて

揺られ揺られて着いたのは

7 赤錆色の焼跡から
22 疎開と浮浪とスリ学校
38 最初のトンスラ
54 ノカミ地下道に舞戻る
70 銀座のカンジーとの出会い
85 ヒトノセンチテクソコカン
96 親よりタチッコがいいよな
110 竹の笛と手旗信号
128 偽化粧品製造工場

その名も高き練馬区の
東京少年鑑別所

練鑑夜が更け窓あけりや
あの尾あたりがスケのヤサ
スケらべん今頃なにしてる
写真片手に頬ぬらす

一年三月の刑終えて
ようやくシャバに戻ったか
可愛いスケちゃん人の妻
泣く泣くおいらはまたグレル

(別歌)

父さん母さんなぜ死んだ
おいらを残してなぜ死んだ
お墓の前にひざまづき
幼い頃を思い出す

142 ユー・ウオント・シャクアノフ
153 サカノちゃ怖いよ柳にお化け
160 インターナショナル
174 やつらはネムッテいるぜ
185 野良猫みたいなヤツだな
192 オンをアタで返す
203 李先生とシャノクナイフ
213 おれはもう子供じゃない

赤錆色の焼跡から

家が焼け、肉親を失ってからすぐに街へ出た連中には、ゆめがのった。もしかしたら、親きょうたいが何処かに生きのびているかも知れず、親せきの誰かと偶然に行き会うかも知れないからた。

だか、おれにはゆめがなかった。おれは街へ出るのが遅すぎたのだ。おれは一年間も、千葉県松戸の親せきで暮してしまい、その間に親きょうたいの死を確認させられたのだ。

確認といっても、おれは両親と姉二人の死体を見たわけではない。黒焦げの死体はいやというほど見たか、とれも見覚えのないもので、近所の人の死体さえ見なかったのである。しかし、法律的にもおれの親きょうたいの死は認められ、菊屋橋警察署は死亡を証明する書類を発行した。

「これにはすこし嘘もあるけどな、こんなときやさかい、仕方ないわ」といしながら、その書類をおれの目の前にひろげたのは祖母である。

書類によれば、空襲当時、おれの家には細川勇七という人が同居していて、その人かおれの親きょうだいの黒焦げ死体を見たということになっている。だが実際には見ていないのだ。見ていない死体を見たという、それをすこしの嘘、仕方のないことだと祖母がいったのだ。

細川勇七の証言によれば、おれの親きょうたいは、浅草国際劇場から蔵前へ通じる十三間道路を避難中、強風が運ぶ火にあおられ、バタバタと倒れる人々とともに死んだ、ということになる。そして更に、

「あの人は根っからの洋服屋だったんですな、ミシンをしっかりとかがえて死んでました。そしてその死体に折重って、女房と娘も黒焦げしてした」という、実に鮮明な嘘をついたのである。

警察が死を認め、戸籍からおれの親きょうたいが消えると同時に祖母は宣告した。

「きょうから、おまえは、わての一番しまいの息子や、そのつもりでしっかりやるんやて」

祖母の息子になるということはその日から働くということを意味する。他の息子たちも娘たちも、小学校を出るか出ないかで働いていたからだ。

おれは五時に起された。よず水くみたが、井戸から台所まで百米ほどの道のりをハケツを両手に十回ほど往復する。次に自転車を掃除する。マキ割りをする。庭を掃く。その当時は新聞が個別に配達されなかったので、新聞を取りに行く。その帰り道、新聞を読みながら歩く。こ

それが唯一の楽しみだったがゆっくりは出来ない。早く食事をすませて学校へ行かなければならない。学校へ行く、これがおれに残された特典だったのだ。

イモかカボチャの入っためしを食う。これがまた大変だ。祖母がおはちのそばに坐っている。片ひじをおはちの上にのせている。

「たんと食べや、松戸の家しゃ、ごぜんもろくに食へさせんいわれたら、恥やさかいに……」
とは言うのだが、おはちの上にのせられた片ひしは、とけてくれない。それをどけてもらってから、自分でめしをつぐわけだが、これは苦痛だ。

弁当としては、イモ二本をいたたく。おれは呟までの道程でイモを食ってしまふのだ。そうでもしなければ、あの当時の殺人的満員電車にのれるものではなかった。

学校から帰ってくると、またひとしきり水くみをやる。自転車で使いに出る。五里や十里は
当り前だ。買い出しにも行く。イモ俵を荷台につむと、ハンドルがあがってしまう。しかみつくようにして山道を往復するのだ。

敗戦の日、天皇の放送をきいたのも、買い出しに行った農家の庭先だった。中学一年のおれにはなんのことやら、よくわからなかった。か、あくる日学校へ行くと、日本は負けたのだという話を話していた。そして松戸へ帰ると、祖母の陣頭指揮で、叔父や叔母が庭に深い穴を掘り、ミシン、金、貴金属類を埋めているのを見た。アメリカが来るとられてしまうという

のである。

「もし、死んだらどうする？」という質問を発しようと思ったが、祖母の横顔を見つめてやめた。

「こんなババアは、絶対に死なない」と思えたからだ。いまでも、おれはそう思っている。

開市が松戸の駅前にも出来た。浮浪児という言葉が流行しだした。おれも見つた。おれは彼らがうらやましかった。連中にはゆめがあるように思えたからだ。

おれに手回しの製粉機をまわす仕事かふえ、そのために虫歯が激しくうずいた。おれは痛む頬に風を当てたいと思い外へ出ると、そのまま、街へ出たのである。

街へ出たとはいえ、いきなり地下道へもぐりこむほどの勇氣はなかった。おれはなんとなく、上野駅常磐線電車ホームから地下道へと足を運んでみたのだが、まず、そこにわきおこっている異様な臭気に驚いたのである。それはある部分において、テモ隊が坐りこんだ国会周辺の六月十九日朝に似ていたが、それにくわえて、アカまみれの体臭と草いきれにも似た精液の匂いが混じりあっているのだ。国会周辺には小便の匂いがよんでいただけである。

おれは鼻をつまむようにして地下道をぬけた。地下道の暗い両わきにコロゴロと寝ている人が、いまにも生命を失う栄養失調というよりも、生死をこえた存在に思えたことは確かで、

おれはまだまだ足もとにも及ばぬと考えたのだった。

おれはめめしく幼時を思い出しながら上野駅前から地下鉄イナリ町駅をすぎ、菊屋橋警察を横に見て、おれが生まれ育った町の焼跡に近づいた。

敗戦後半年を経て、ポチポチとバラックの家が建っていたが、おれの家があり、おれの親きょうだいが住んでいた場所には、ボウボウとひめむかしよもぎが生えているだけなのだ。便所



のあったあたりに見当をつけ、小便をたれた。乾いた灰にみるみる吸い取られてゆくおれの小便を見つめ、きょうから、おれは浮浪児なんだと決意したような気がする。

ここが玄関、ここが風呂場、この辺に階段があったはずだ、とすれば、このあたりにおれの机があったと思い、カワラのかけらで灰をほると、たしかに固い手応えがある。指先がよごれるのもかまわず、掘り出したのは、ヘエコマの奴だ。金属の供出のときにも、ひたすらに寸ったベエゴマ、その一つ一つにおれは名まえをつけていた。美しく八角形にすりへらしたコマには角ヘエという名かつけられていたし、するとくった尻を持つ、エはケノトンである。おれはかなりの時間、ヘエコマを下にしていた。そのときだ、おれはいきなり背後から強い力でその場に押さえつけられたのである。その男は、

「けしからん、ひとの焼跡を荒らしやがって……」というような声を発したようたか、おれにしてみれば、けしからんのはその男だ。

おれは腕を押さえられたまま、その男の顔を見た。しばらく見つめあった。

「おお」とい、うような声を出したその男は、おれの腕を放すと、今度はおれの両肩をがっしりとつかんだのだ。

「あんた、アキちゃん、アキちゃんだね、佐野さんとこのアキちゃんだね」

おれは相手の顔を見つめたが、ぜんぜん覚えがないのである。男は名のった。名のられてぼ

んやりと思い出したのだが、その男はおれの家の隣に住んでいた高柳という人の親せきで、しばしば隣りの家にきていた人だった。そしておれは、高柳の家も全滅したらしいことを知った。その男の話によれば、隣組二十一世帯のうち、全滅がおれの家を含めて八世帯、家族のうちだれも死なぬというのはまずいというのである。

「それでいて、この町内には一個のショウイ弾も落ちていないんだがね」ともいった。

いま何処にいるのかときくから、松戸にしていると答え、親せきがあるのがせめてもの幸福だといわれたか、おれは既にその親せきを脱出してきたのだ。

ベエコマを丁に、おれはひとり焼けたたれたヒルの屋上にのぼった。三階建のこのビルは、おれが字んた国民学校だったか、いまではただの焼けビルなのだ。溶けたカラスがこびりついている窓わくが赤錆色に空を区切っているたけた。

おれは屋上から眼下にひろがる焼跡をみた。赤錆色の土と、その土から生いしげるひめむかしよもき。おれが子どものころ、一度も見たことのない植物だ。

静かだった。おれは死にたいと思った。死ねば、死んだ親きょうだいに会えるのではないかと考えたのだ。いや、考えたというより、ふと、そう思っただけである。おれは高い所をえらび、煙突にのぼった。鉄バシゴもまた錆びていた。おれの手は赤錆色に染まった。おれはなぜ死ぬことをやめたのだろうか。

おれは地下室へも行って見た。何度か、防空演習で避難したところだ。コオロキのすみかのようなおれの家の防空壕にくらべれば実に「派な地下室であつたはずなのだが、変につめたい空気が流れているような気がした。水がたまっているのた。

そしてその水の底に、鉄カフト、警防団のバント金具、そして確かに人間の骨である白いものが沈んでいたのである。それは何十人分もあつた。

夕暮れになつていたような気がする。いままで赤錆色だつた焼跡が黝んできたのた。耳をすまして何もきこえないのである。動く影さえないのである。東京といへば騒々たるところと、いう感じがだれにでもあるはずだが、その東京で、音もなく動くものもない瞬間があつた。東京は死んでいたのだ。

おれは急いだ。焼跡に夜がきたときの暗闇は、想像しただけでもおそろしい。それは暗闇というよりも暗黒というほうがひたりするたろう。その暗黒の世界を思ひ死人の魂が乱舞する、という想像をしたのである。おれにとって、死とは黒いになるという以外に考えようがなかったのだから、亡霊が出現するとなれば、それも黒いはずなのた。

おれは急いだ。そして上野の駅前へたどりついた。上野駅正面玄関の時計が変に黄色く見えたのを覚えている。昼間の地下道にくらべて、人口は数十倍にふえていた。異臭もさほど気に

ならず、悲惨な感じも消えている。内心におどおどしたものをかかえながら、おれはさりげない姿勢で佇み、また歩き回ったのだが、確かに夜の地下道にはなんともわけのわからぬエネルギーが溢れているのを感じた。

ゾウスイ、ニギリメシ、コノペパン、落花生などが売られていた。売っている人間も買う人間も同じような服装で、同じような顔つきをしていた。

ハーモニカを吹いていた若い男か、いきなりおれのところへやってくると、

「おい、どこからトンズラしてきた」ときいた。トンズラとは何かというほどおれもばんやりはしていない。おれは今日の事態に備えて新聞や雑誌にあらわれる浮浪児の言語、つまりフチヨウを出来る限り暗記していたのである。おれは早速、

「トンズラじゃねえよ、ヤサグレさ」というような答えを発した。

この問答ひとつによって、おれはハーモニカの男をアニキと呼ぶはめになってしまったのだが、おれがその男と組んで仕事をしたのは一度だけである。

その一度の仕事というのか何んとも奇妙なことだった。おれはハーモニカの男をアニキと呼ぶ三人の浮浪児とともに、京成新三河島駅近くのハタヤの仕切場へ連行され、まるで馬小屋のように仕切った部屋へ入れられた。

他の部屋には花札に熱中する男たちがいたり、なんとなく坐っていると聞いた感じの男と女